

東樓復原整備に関する 復原画と動画の制作

概要 2025年5月現在、国営平城宮跡歴史公園では国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所（以下、公園事務所）により第一次大極殿院東楼の復原整備が進められている。奈文研は公園事務所から「第一次大極殿院建造物復原整備他にかかる調査委託」を受託し、2024年度は第一次大極殿院東楼復原整備に関する復原画1点と動画6点を制作した。それぞれ、東樓上層から朝堂院を見渡す景色を描いたA2サイズの復原画と、東楼復原整備工事を紹介する各5分程度の動画6点である。一部の業務は制作会社に再委託し、復原画は田中さとこ氏、動画は株式会社シェルバが制作にあたった。成果品は公園事務所に納品し、活用・公開されている。以下では復原画と動画の制作の過程と検討の経緯について報告する。

（横山 舞・神谷友理子）

復原画 東楼は第一次大極殿院南門（大極門）の東側に、上層に床を設ける2階建ての楼造の建築として整備が進められている。制作にあたり、当初は東楼の素屋根に接する見学デッキから朝堂院広場を遠望した復原画を要望された。しかし、竣工後は一般来園者が東楼の上層に上がらない施設運用が予定されたため、上層における空間を体感できるような復原画とすることを提案し、公園事務所の了承を得た。そこで上層に床が張られていて四周の柱間装置が開放であるという、東楼の建築的な特質を感じることができるように、上層の縁の手前から南方を眺める構図とした。

復原画は奈良時代前半の元日朝賀の当日を舞台とした。大極殿院・朝堂院には盛装した群臣らが大極殿に向かって整列し、画面では東樓上層から南方の朝堂院側を望むため、正対した群臣を描くこととなる（図48）。制作は以下の過程で進めた。まず奈文研がこれまでに作製した平城宮の3Dモデリングデータを活用して全体の構図を決定した¹⁾。次に建造物と整列する群臣の詳細について、建造物遺構研究室と歴史史料研究室の研究員が検討した。その後、田中氏が絵画制作を開始した。研究員の考証と田中氏の作画を繰り返した上で、下絵を決定した。そして、田中氏がペン入れ・着彩を施し、復原画を完成させた。復原画はA2サイズケント紙にペン・色鉛

筆・パステルを用いて描いた。

これまでに元日朝賀のようすは早川和子氏や野上隼夫氏によって絵画作品として描かれている²⁾。早川氏は複数の作品で元日朝賀を詳細に描いているが、藤原宮を舞台とするものが多数である。また野上氏の作品は奈良時代前半の平城宮を鳥瞰した構図で描いており、群臣らも描かれるが、細部は省略されている。これらを踏まえると、今回制作した復原画は、これまで詳細に描かれたことのない朝堂院における元日朝賀の際の建築や群臣のようすを示し、東樓上層から眺める構図が特徴である。東樓上層を画面の手前に大きく配する構図の実現には、東楼の建築細部を描くことが不可欠であったが、奈文研の大極殿院復原研究の成果を活用し達成することができた。

建造物の検討 全体の構図の決定には前述の3Dモデリングデータを活用し、その後、復原画で描く建造物の細部を研究員が検討した。各建物の検討の経緯は次の通りである。まず画面の視点である東楼は、一連の『平城宮第一次大極殿院の復原研究』で示した復原案をもとにして、復原画では上層の床の高さや画面の手前に見える高欄・地垂木・飛檐垂木、全体の塗装など細部まで描くことができた。画面中央の四朝堂は発掘成果と現存遺構を根拠とした。東側の第一堂と第二堂の遺構を発掘調査（平城第102・140次調査）で検出しており、前者は桁行10間、梁行4間、後者は桁行21間、梁行4間の南北棟の礎石建ち基壇建物と考えている。現存する唐招提寺講堂は平城宮朝集院朝集堂を移築改造した建築で、竣工時からは改変が加えられているが、現存する唯一の奈良時代の宮殿建築の遺構であり、復原案が提示されている³⁾。中央区朝堂院と朝集院の違いはあるものの、奈良時代の宮殿の建物の現存遺構として、制作にあたっては細部の参考にした。これらから各朝堂は、両側妻壁と背面側両端間を壁、ほかは吹放しとして、切妻造、本瓦葺、架構は二重虹梁棟とされた。次に朝堂院の東・南・西を囲む遮蔽装置は発掘遺構から掘立柱屏とと考えられており（平城第176次調査等）、今回の制作でもその解釈に従った。掘立柱屏の構造は黒崎直氏による研究を参考に描いた⁴⁾。朝堂院南門は発掘調査（平城第119次調査）で掘込地業の痕跡を検出しているのみである。今回は既往研究に従い桁行5間・梁間2間の切妻造の单層門として描いた⁵⁾。さらに遠方には薬師寺の2塔をのぞんでいる。

（横山）

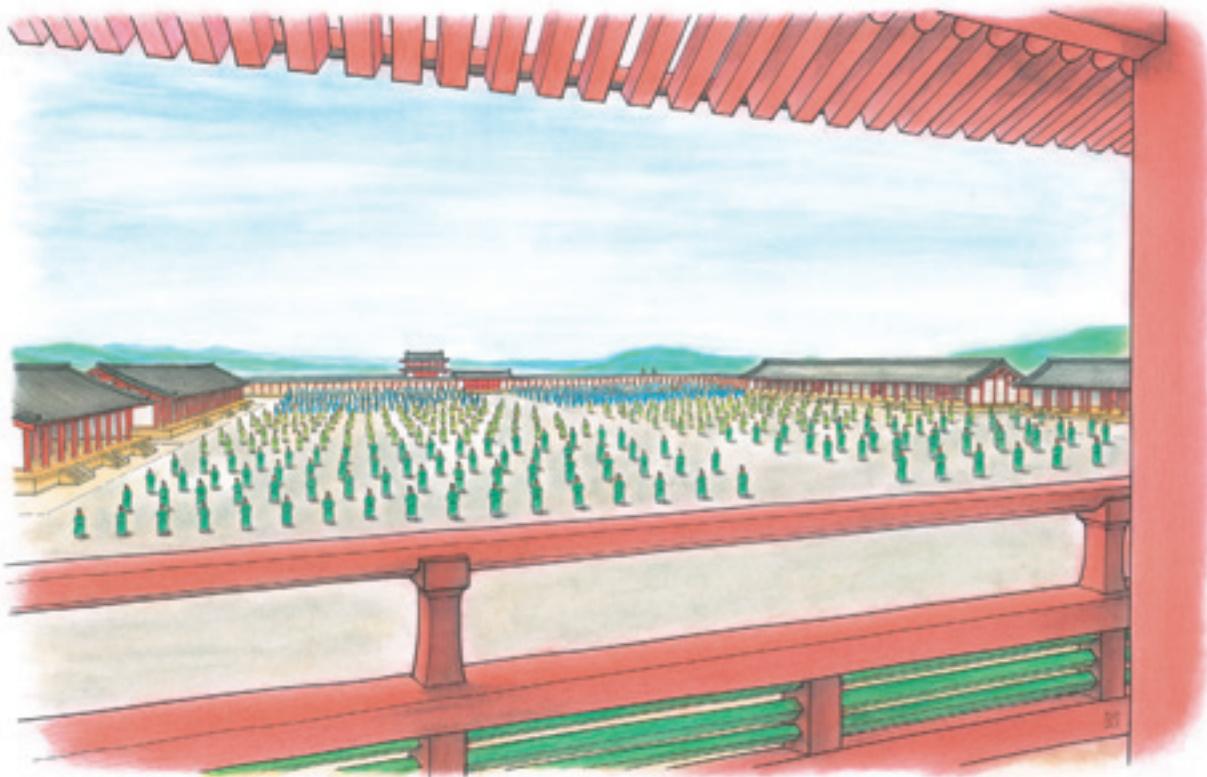


図48 復原画・平城宮第一次大極殿院中央区朝堂院（田中さと子氏描画）

文献資料からの検討 奈良時代前半の元日朝賀については、正史にあまり詳細な記録が残っていない。そのため、主として法制史料や平安時代の儀式書を根拠に、奈良時代前半のようすを類推する方法を探った。

大極殿院は基本的に天皇の空間であり、藤原宮や奈良時代後半の平城宮では、朝賀の際に官人は大極殿院南門の外、すなわち朝堂院朝庭に列立したと考えられている。一方、奈良時代前半の平城宮第一次大極殿院では、磧擁壁より北が天皇の空間、それより南の礫敷広場が臣下の空間と考えられ、朝賀の際には礫敷広場に官人が列立したと想定されている⁶⁾。ただし、すべての官人が礫敷広場に並ぶか、大極殿院南門を挟んで朝堂院朝庭にも並ぶかについては、意見が分かれる。復原画の検討にあたっては、大極殿院に五位以上の官人が、朝堂院に六位以下が列立するという立場を探った。

朝堂院朝庭に並ぶ官人の数について、六位以下の長上官（京官）は、養老官位令・職員令から600人余と推計されている⁷⁾。官職の定員は、六位相当が139人、七位相当が163人、八位相当が247人、初位相当が68人である⁸⁾。あくまで法制上の数字であって実態とは異なるが、およその目安とえることができる。

官人の並び方は、『内裏儀式』『内裏式』『儀式』など平安時代の儀式書によれば、東西に分かれて、位階ごとに1丈3尺（約3.9m）の間をあける。同じ位階の官人どうしの間隔については規定が見えない⁹⁾。

官人の衣服（上着）の色は、養老衣服令5朝服条によれば、六位が深緑、七位が浅緑、八位が深縲、初位が浅縲で、大宝令も同様の規定であったと推定されている。他は、頭巾が黒、腰帯が黒、袴が白、襪が白、履が黒で、位階に関わらず共通する。

元日朝賀では、衛府が儀仗を立てる（養老宮衛令22元日条）。中央区朝堂院には、左右兵衛府各100名が配置されたと推測される¹⁰⁾。兵衛府は、平安宮では龍尾道の階下に陣を敷くことから（『内裏儀式』『内裏式』『儀式』）、平城宮では第一次大極殿院南門の近くにいたと類推されるが、正確な位置は不明である。復原画では、画角外の左右もしくは手前にいると想定している。

兵衛府の儀仗は、虎像纛幡1旒、熊像幡4旒、小幡96旒、鉦・鼓各1面である（『儀式』）。虎像纛幡の高さが近衛府の龍像纛幡と同じ2丈余（『文安御即位調度図』）だとすると、纛幡の先端は東樓の上層近くに達する可能性もある。

（桑田訓也）

小 結 以上のように復原画を建築史学と文献史学の両側面からの検証にもとづいて制作した。特にこれまでに描かれたことのない東楼の建築の細部や朝堂院に整列する役人を詳細に描いたことが成果である。一方で、制作にあたっては遺構や史料が明確ではない部分の復原は控えることを基本方針としたため、朝堂院の空間や元日朝賀の雰囲気が完全に表現されているとはいえない。場合によっては積極的な推定復原をおこなう方針とすることで、新たな課題や視座の発見の可能性があるだろう。また今回制作した復原画を含め、大極殿院周辺を舞台とする絵画作品や模型のほとんどが元日朝賀のようすを表現している。しかし、さまざまな朝儀の舞台であったとされる朝堂院では、ほかの行事のようすを可視化しようとすることで、その多様な姿を示すことができるはずで、これらは今後の課題である。

(横山)

動 画 東楼の復原を紹介する動画は、シリーズテーマを『平城宮第一次大極殿院 東楼復原の舞台裏』とした。2024年度は「導入編」「研究編」「基礎・材料編」「木組編」「屋根編」「古代金具復原編」の6編を完成させた。

動画制作にあたっては、メインターゲットを「歴史や文化財に興味があり、基礎的な歴史知識がある人」と設定した。公園事務所からは、復原事業情報館や東楼素屋根見学デッキで上映する動画制作を要望されていた。いずれも、一般的な平城宮跡の見学動線からは1歩入りこんだ場所に位置することから、ここで上映する動画の主な視聴者としては、平城宮跡や奈良時代の歴史に対し一定の興味・理解をもつ層が想定できたためである。

動画のコンセプトとしては、現場の臨場感を伝えることを意識した。当初は、復原工事の工程を時系列で紹介する方法も候補にあがっていたが、最終的には、各編でテーマを決め、復原研究や整備工事に関わる担当者の思いや技術の高さ・現場の臨場感を、より洗練された形で伝えることを意識した。制作にあたっては、動画視聴後に、復原研究や復原整備工事の現場を担当者から直接解説を聞きながら見学したような満足感を得られることを目指した。動画で紹介する仕事の大半は、日常的には公開していないエリアで進められている。これを「動画」という媒体を通して紹介することで、平城宮跡の価値や復原研究・復原整備工事の意義への理解を深める一助にしたいという狙いもあった。



図49 動画のオープニング

各動画の構成については表10にまとめた。全編とも、オープニング・本編・エンディングの3部構成とし、オープニングとエンディングの要素を各編である程度統一することで、シリーズとしての一貫性をもたせた。また、復原に関わる研究者・技術者・職人を「東楼復原事業で働く人」として紹介し、復原行為への実在感と親近感を強めることも意図した。

「導入編」ではシリーズの第1作として、東楼の概要を紹介した。考古学、建築史学、文献史学による研究成果から復原整備工事に至るまでの多くの情報量を、時間制限のある動画に納める必要があった。そのため、5つのテーマを設定し、東楼の歴史、建物の構造、発掘調査、復原研究、復原整備工事というトピックごとに内容を整理して紹介した。

「研究編」では東楼の発掘調査成果と復原原案の検討過程について、東楼復原案の変遷を紹介しつつ、最終的な復原原案がなぜこの形式になったのかを説明した。

「基礎・材料編」「木組編」「屋根編」は、復原整備工事の作業の紹介を主軸に展開した。現場作業の見どころについては、復原整備工事の設計監理を担う公益財団法人文化財建造物保存技術協会と、施工を担う株式会社竹中工務店の各担当者に取材をし、復原原案をもとにつくられた復原整備実施計画が、どのような工夫を重ねて実現されているのか情報を収集した。特に、外周柱や虹梁などの巨大な材の取り回しは、東楼の復原整備工事の特徴を示すと考えた。巨木の切り出しから運搬、柱建て、柱と梁の組立にいたる工程の詳細について聞き取りし、動画内容に反映させた。

「古代金具復原編」では、東楼復原整備工事と並行して進めた、古代技法による金具の復原製作を紹介した。

表10 東樓復原の舞台裏 動画構成

【導入編】	【研究編】	【基礎・材料編】	【木組編】	【屋根編】	【古代金具復原編】
オープニング	オープニング	オープニング	オープニング	オープニング	オープニング
天皇の宴の場	東楼の発掘調査	基礎を築く	外周柱を立てる	瓦の文様の復原	復原の手がかり
掘立柱×礎石建ち	復原原案の検討～完成	木材の調達	大梁をかける	鷲尾の復原	古代の铸造に迫る
平城宮最大の柱根	研究リーダーが語る	石材の調達	床板を張る	鷲尾の取り付け	古代の鍍金に迫る
建物の謎に迫る	東楼復原事業で働く人	東楼復原事業で働く人	構造の補強	東楼復原事業で働く人	東楼復原事業で働く人
伝統技法と最新技術の融合	エンディング	エンディング	東楼復原事業で働く人	エンディング	エンディング
エンディング			エンディング		
復原事業情報館の案内					

東楼の復原整備工事では、復原研究の成果を受けて、垂木木口の一部に古代技法により復原した金具24枚を取り付けることとなり、奈文研を中心に、金具の技法研究を進めた。動画では、古代技法による金具の製作工程を紹介するとともに、その過程で得られた新知見も披露した。

今回の動画については、視聴者として基礎的な歴史の知識がある層を設定したものの、各番組は、学術的な成果に踏み込む内容で、専門用語を使わざるを得ない場面も多く、いかに情報を整理してわかりやすく伝えるかが大きな課題となった。そこで、視覚的にわかりやすい情報を増やすように心がけた。動画素材については、公園事務所から提供された動画に加えて、奈文研が所蔵する図面や写真、動画用に新規作成したイラストなどを補いながら制作を進めた。建築の細部については、より具体的なイメージを提供できるように施工者から3D画像の提供を受けた。現場の画像についても工事関係者に幅広く協力を仰ぎ、より臨場感のある動画素材を準備した。また、編集時には動画だからこそ可能な表現を意識し、アニメーションや効果の入れ方を工夫することで情報を補うようにした。以上の動画は、平城宮跡歴史公園の公式YouTubeチャンネルおよび復原事業情報館で公開・上映されている。また奈文研公式YouTubeの〈なぶんけんチャンネル〉でも公開を進めている。

(西田紀子・小沼美結／株式会社シェルバ)

謝辞

本業務をおこなうにあたり、国土交通省近畿地方整備局（国営飛鳥歴史公園事務所・京都営繕事務所・営繕部計画課・営繕部整備課）、平城宮跡管理センター、公益財団法人文化財建造物保存技術協会、株式会社竹中工務店、同社橋本慧氏、株式会社シェルバに多大なる協力を得た。ここに記して謝辞を表したい。

註

- 1) 3Dモデリングデータは平城宮・京復原CG動画制作のために、1978年に奈良市が作成した平城京の復原模型の設計図面で、その後の発掘成果等を反映させる形で制作された。（『平城宮・京復原CG動画制作』『奈良文化財研究所七十一年の軌跡』79頁、2022。）
- 2) 早川氏の作品については『飛鳥・藤原京展－古代律令国家の創造－』朝日新聞社、166頁、2002。『早川和子が描く飛鳥むかしむかし』飛鳥資料館、66-69頁、2017。野上氏の作品については『平城遷都と律令』朝日百科日本の歴史48、朝日新聞社、1987。
- 3) 『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』奈良県教育委員会、1972、第24～28図。
- 4) 黒崎直「掘立柱塀と築地塀－藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって－」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古論集刊行会、1997。
- 5) 『平城宮第一次大極殿院の復原研究』では朝堂院南門は二重門であったという結論を得ているが、復原画の制作時期には報告書の刊行前であり、成果の反映が叶わなかつた。南から朱雀門、朝堂院南門、大極殿院南門の二重門が3棟並ぶという姿は未だ視覚化された表現では発表されておらず、これは今後の課題である。
- 6) 幢旗遺構が傳積擁壁の上で見つかっていることも、この想定を支持する（大澤正吾「平城宮幢旗遺構の発見」『藤原から平城へ 平城遷都の謎を解く』奈文研、2019）。ただし、大澤によると第一次大極殿院南門の前面にも幢旗遺構の候補がある。それらが奈良時代前半の元日朝賀にともなう幢旗遺構だとすると、大極殿院内庭に列立しない場合もあったことになる。
- 7) 鬼頭清明は604人（『古代木簡と都城の研究』 増書房、152頁、2000）、中村順昭は貴族の家令も含めて650人余（『律令官人制と地域社会』 吉川弘文館、104頁、2008）とする。
- 8) 養老官位令に記載されている官職のうち、外官と家令を除いて算出した。
- 9) 官人の立ち位置を示す版位については、描画を省略した。
- 10) 山本崇「平安時代即位儀とその儀仗－文安御即位調度図考－」『立命館文学』624、2012。